「男、突っ走る！」

第57回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（21）　名古屋芸術専門学校3年生

眞榮田　浩平（21）　名古屋芸術専門学校3年生

福本　瑞枝（21）　名古屋芸術専門学校3年生

長井　夏美（21）　名古屋芸術専門学校3年生

船倉　篤志（21）　名古屋芸術専門学校2年生

1

名古屋芸術専門学校・廊下

エレベーターから雅也と篤志が出てくると、ベンチに座る。

雅也「あそこのオムライス、初めて食べた。あんなに美味しかったんだね」

篤志「だろ。それに、店員さんめっちゃ可愛いし」

雅也「あ、そういうこと言っちゃって良いのかな」

篤志「別に良いだろ」

雅也「あつぽん、まだ自習残ってるの？」

篤志「それがさ、卒業単位足りなくてさ」

雅也「えッ……？　だって、あつぽんいつも学校にいたイメージあったけど」

篤志「それ、いろんな人に言われてる」

雅也「だって、いつも学校にいるイメージのあるあつぽんが、まさか卒業単位足りなくて、補修で自主課題とかレポートやってるなんて思わないもん」

篤志「単位、稼ぐ方法ないかな」

雅也「あ、そういえばさ、卒業進級制作展は確か作品でも単位でるし、実行委員も単位出たよね」

篤志「ああ、確かに」

雅也「でもあれか、実行委員に三年生がいるのは変か。それに、後輩たちもやりづらいだろうしね」

篤志「当日の展示会の立ち当番のスタッフとかなら良いかも」

雅也「当日の手伝いとか、何かできないかな」

篤志「え、まさかうっちー。また何かやるつもり？」

雅也「だってさあつぽん、考えてごらん。一年生と二年生と、俺たち散々イベントごとにはやれ実行委員会だの有志だのって集まったじゃん。現にあつぽんと授業が被るのは一年の時の鈴本先生のデザインの授業と、二年生から始まった山浦先生のシナリオの授業……あ、そういえばあつぽん、しなりの授業全然来てなかったね」

篤志「だろ」

雅也「まあでもさ、被る授業は少なったけど、いろんなところで一緒になったから、あつぽんや、他の専攻の友達だってたくさんできたんだもん。最後の卒業進級制作展だったら、ちょっとしたお手伝いでもしようかなと思ってるの」

篤志「あ、そういえば今年の実行委員会、人が少ないって言ってたわ」

雅也「じゃあ、実行委員、当日のシフト困るんじゃない」

篤志「当日スタッフの協力、実行委員に頼んでみる。ちょうど、ゲーム系の後輩が実行委員やってるから（と階段を上っていく）」

雅也「分かったら、また教えて」

篤志の声「はいよ」

と、４０１教室から瑞枝が出てくる。

瑞枝「うっちー」

雅也「ああ、みずちゃんお疲れ。自習？」

瑞枝「卒業進級制作展の作品作ってたの。朝

からずっとパソコン向かってたから、ちょっと休憩しようと思って」
雅也「そっか」
瑞枝「うっちーは、もう卒業進級制作展の作品作り、終わったの？」
雅也「とんでもない。ほら、この間千葉に行ったじゃん」
瑞枝「ああ、脚本決まったんでしょ。おめでとう」
雅也「ありがとう。その準備のほうばっかりやっちゃってて、いつの間にか作品制作が後回しになっちゃったんだよ。フリーペーパーの締切りもあったし」
瑞枝「そっか。うっちー、フリーペーパーの連載と取材記事のほうも、まだやってるんだもんね。学生事業部長、未だ健在なんだ」
雅也「うん。一緒にやってる子の一人で、新聞記者志望の大学生の子がいてね、二代目事業部長はその子に任せようかと思ってるの。だから、少しずつシフトチェンジをし

てるところ」
瑞枝「相変わらず、忙しいんだね」
雅也「今年の卒業進級制作展の出展作品は、去年から編集長やってる歴史雑誌と、今年も書下ろしのシナリオ本を出そうかと思って、今はその編集作業やってるところなの」
瑞枝「去年も、確か雑誌とシナリオ本だったよね」
雅也「うん。しかもね、雑誌もシナリオ本も、全部あつぽんは持ってるんだよ」
瑞枝「あつぽんが？」
雅也「一年生の時、万年筆の短編小説書いたでしょ」
瑞枝「ああ、あったね、そういえば」
雅也「あれ以来、あつぽんは俺のファンになってくれてね、俺が手掛けた作品は全部コレクションしてくれてるの。自分ちの部屋の本棚の一角に『うっちーコーナー』っていうのを作ってくれてるんだって」
瑞枝「じゃあ、あつぽんは大事なうっちーの

ファン一号ってわけだ」

雅也「そういうこと」

瑞枝「これから、どんどん仕事来るんじゃないの。学校のブログ見たよ。うっちーが脚本デビューすること、大々的に書かれてたよ」

雅也「ああ、あれ見たんだ」

瑞枝「いろんなところに拡散されてるよ。でもすごいじゃん、在学中にちゃんとデビューできたんだもん」

雅也「何としても在学中に、デビューしたいっていう思いがあったからね。先輩たちは、一般就職とか、全然専門的な仕事についてないでしょ。まあ、そういう求人が学校に来ないっていうのもあるかもしれないけど、何かデビューに対するやる気があまりない感じだったからね」

瑞枝「それに比べたら、うっちーはポートフォリオも作ったり、二年連続で個人のシナリオ本出したり、前例ないことばっかりや

ってたね」

雅也「前例がないなら作っちゃえば良い、っていうのが俺のポリシーだもん」

瑞枝「うっちーらしいわ。でも確かに、うっちーは前例のないキャラだよね。文章系の専攻なんて、恥ずかしい話映像系とは仲が悪かったじゃん、特に先輩たちの代は。でも、うっちーがその壁を壊してくれた。確か、二年生の最初の新入生歓迎会の実行委員長もやったよね？」

雅也「やった。ゆきちゃんや加藤、ぐっち、おっくー、やっすーに手伝ってもらってね」

瑞枝「大体、イベントごとの実行委員長って、イラスト系かグラフィック系の先輩がやることが多かったでしょ。だから、うっちーが実行委員長やるって聞いたときは、ちょっと意外だった」

雅也「正直ね、文章系って他の専攻と接点持ちたがらない子が多いでしょ。先輩たちもそうだった。だから、正直陰気なイメージ

があったんだよね」

瑞枝「ああ、分かる気がする。うちの学校、コミュ障な人がそれなりにいる気がするけど、その中でも文章系はトップクラスだもんね」

雅也「そうそう。俺もコミュ障だから」

瑞枝「は？」

雅也「え？」

瑞枝「今何つった？」

雅也「俺もコミュ障」

瑞枝「どの口が言ってるんだか（と雅也のデコを叩く）」

雅也「痛ッ。久しぶりに、叩かれたわ」

瑞枝「叩き甲斐があるわ。良い音出るし」

雅也「俺のデコは鼓じゃないんだよ」

瑞枝「へえ、知らなかった」

雅也「嘘言うなって」

瑞枝「こういうやり取りも、もう数え切れるぐらいしかできないのかな」

雅也「進路、どうなったの？」

瑞枝「まだ決まらなくて」
雅也「そっか」
瑞枝「……」
雅也「東京行くの？」
瑞枝「それもどうか、まだ分からなくてさ」
雅也「なかなか、上手くいかないもんだね」
瑞枝「うっちーは、どうするの？」
雅也「実はさ……俺、個人事業を立ち上げようと思って」
瑞枝「え、フリーランスってこと？」
雅也「うん。今、開業届のこととか、確定申告のこととか、いろいろ勉強始めたばっかりなんだけどね」
瑞枝「うっちーの個人事務所を立ち上げるんだ」
雅也「まあ、そういうこと」
瑞枝「社長になるわけだ、うっちーが」
雅也「（苦笑して）そんなんじゃないよ。社員がいるわけじゃないんだから」
瑞枝「でも、自分で会社起こすようなもんで

しょ。やっぱり、うっちーの行動力はすごいわ。そりゃデビューもできるよね」

雅也「デビューが決まったらそれで良いってわけじゃないけどね。これから、コンスタントに仕事を取れるように仕組みも作らなきゃいけないし、脚本はもちろんメインでやるけど、せっかく雑誌編集や記事執筆のスキルも学んだから、それも事業内容にしたいなと思ってるの」

瑞枝「事業計画ってやつね。ほお、何だか本当に社長みたい」

雅也「やめてってば」

瑞枝「個人事務所開業準備もあって、そんなにいくつも執筆案件抱えて、よく倒れないね」

雅也「不思議とね。おかげで、ちょっと体調崩すことはあったけど、このまま順調にいけば三年間皆勤だし」

瑞枝「え、うっちー皆勤賞なの？」

雅也「学校が大好きで、ほぼ毎日通ってたら、

いつの間にか必須科目は出席率百パーセントになってた。トータル計算したら、何百時間授業受けた計算になるんだろう」

瑞枝「鈴本先生が仰ってた、学校の設備を使いまくれ、っていうのを見事に体現したわけだ」

雅也「まあ、そういうことだね」

瑞枝「でもこれ以上は、無理しちゃダメだよ。さすがにもう抱えるものはないかもしれないけど」

雅也「あ……もう一個、あったわ」

瑞枝「何？」

雅也「実はさ、眞榮田がねドキュメンタリー要素を取り入れた短編ドラマを作るんだって」

瑞枝「ああ、そういえばこの間会ったとき、そんなようなこと言ってたわ」

雅也「それでね、その短編ドラマに出演してくれないかって言われたの」

瑞枝「え、出演？　脚本じゃなくて？」

雅也「そう。だから俺、聞いてみたんだよ。脚本はどうするのって。そしたら、脚本も監督も撮影も編集もタイトルロゴの制作も、全部自分がやるって」

瑞枝「え、眞榮田が全部一人で？　できるのかな、あいつに」

雅也「映像としての技術やスキルのことは、俺は何とも言えないけど、まあテレビ局のインターンでスキル磨いてるから、よっぽど大丈夫なんじゃない？」

と、階段を降りる音が聞こえてきて、篤志が戻ってくる。

篤志「うっちー、オッケーだったよ」

雅也「当日スタッフ？」

篤志「うん。人が足りなくて困ってたから、ぜひ実行委員経験の先輩たちのお力をお借りしたいって」

雅也「良かった」

瑞枝「何の話？」

雅也「卒業進級制作展の、当日スタッフ。せ

っかくなら、俺も何かやりたいなと思って」
瑞枝「まだやることあったね」
雅也「あ（と苦笑する）」
篤志「福本さんも、良かったらどう？」
瑞枝「え、私？」
雅也「そうだよ。みずちゃんも、せっかくなら俺たちと当日スタッフやろうよ」
篤志「単位も出してくれるって」
瑞枝「最後だし、やってみようかな。私、よくよく考えたら、そんなに実行委員会やることなかったし」
雅也「あれ、みずちゃんやってなかったけ？」
瑞枝「私がやったのは、一年生の学園祭のお化け屋敷と、今年の学園祭で焼き鳥屋やったぐらい」
篤志「福本さんって何かしらうっちーと一緒に実行委員やってるイメージあったけど」
雅也「俺も」
瑞枝「残念ながら、私はそんなに実行委員やってません」

篤志「やっぱあれだね、常に学校にいる顔ぶれって、何かしらの実行委員をずっとやってるイメージがあるね」
雅也「しょうがないよ。みんな、自分の家にみたいにずっと学校にいるんだもん。一時期、みんなで学校に泊まろうかなんて話もしたっけ」
瑞枝「したした」
　と、４０１教室から夏美が出てくる。
夏美「ああ、目が疲れる。（とＰＣメガネをはずす）」
雅也「なつ姐さんも、卒業進級制作展の準備？」
夏美「うん。ＣＧ作品を作ってるんだけどね、どうも細かいところとなると、難しくて」
篤志「ＣＧも大変そうだな」
夏美「あつぽん君だって、ゲーム制作は大変なんじゃない？」
瑞枝「しかもプランナーってなったら、全体をまとめなきゃいけないんでしょ」

篤志「まあね。でも、おっくーと一緒に楽しくやってるから」
雅也「この二人が仕切るゲーム制作なら、大丈夫でしょ」
夏美「そうだね」
瑞枝「言えてるわ」
篤志「いやぁ嬉しいな、そんな風に言ってもらえると」
雅也「だって、何か安心感あるもん」
篤志「うっちー（と抱き着く）」
雅也「ちょっと、あつぽん」
と、エレベーターが開き、浩平が出てくる――思わず硬直する雅也と篤志。
浩平「え、どういう状況？」
篤志「いや、何でもない」
雅也「ただのイチャつきです」
浩平「状況が理解できないけど」
瑞枝「あ、眞榮田。うっちーから聞いたよ。卒業進級制作展で出す短編ドラマ、一人で全部やるらしいじゃん」

夏美「え、そうなの？」
篤志「やるなー、眞榮田」
浩平「それなんだけどさ……」
雅也「え、まさか企画頓挫しちゃった？」
浩平「いや、そういうわけじゃなくて……実はさ、全部やる勢いで、もちろん俺もそのつもりだったんだよ。ただ、制作工程をスケジュールに組もうとしたら、今から準備しても、到底一人でできる状態じゃないってことに気づいて」
雅也「だから言ったのに」
浩平「それでさ、うっちーに頼みがあって」
雅也「何？」
瑞枝「まさか？」
浩平「脚本、書いてください」
雅也「やっぱり」
篤志「おいおい。うっちーは、もうドラマや映画の脚本も担当してる方だぞ」
雅也「ちょっと、あつぽん」
浩平「お願いします（と頭を下げる）」

雅也「頭あげてよ。実はね、三日前にドラマの出演依頼が来た時に、多分こうなるんじゃないかなって思ってたの」

浩平「じゃあ……」

雅也「もちろん、書きますとも。眞榮田の最後の作品でもあるんだし」

浩平「ありがとう」

瑞枝「ああ、またうっちーのタスクが増えちゃった」

雅也「タスク増加、大いに結構だよ。考えてもごらん、声がかからなくなったらおしまいだよ。特に俺なんか」

夏美「確かに」

雅也「頼りにされるうちがハナだもん」

眞榮田「そういえばさ、俺とうっちーが一緒に作品作るのって、これが最初で最後ってことか？」

雅也「え……？　（と少し考えると）あ、確かにそうだわ。俺、この三年間、眞榮田と一緒に作品作ったことないわ」

夏美「意外。私、てっきり一緒に何かやってると思ってた」
篤志「ずっと一緒にいるもんな」
瑞枝「作ってなかったんだ」
雅也「俺たち身長も性格も正反対の凹凸コンビだったけど、それはあくまでプライベートなんだろうね。バーベキューとかお泊りとか、アメリカ研修の自由散策とか」
夏美「ああ、そういえばアメリカ研修の自由行動の日、うっちーと眞榮田はどこのツアーパックも登録しなかったんだっけ？」
雅也「そうそう。みんながテーマパークで楽しんでる間、俺とおっくーと眞榮田はホテルの近くのショッピングセンターで楽しく遊んだよ」
浩平「ストロンボリ、美味かったよな」
雅也「あれは美味しかった」
篤志「お泊りって、何？」
雅也「夏休みの時、俺眞榮田の家でお泊りしたの」

篤志「中学生か」
雅也「良いじゃんか。あ、俺ね、ちなみにこの三年間の間で、大久保、眞榮田、加藤と映像専攻三人の男子の家に泊めさせてもらったことが、唯一の自慢」
浩平「それもすげえな。映像専攻じゃないうっちーが」
雅也「よくよく考えたら、俺映像専攻が一番親交あったかもしれない」
篤志「俺はぁ？」
雅也「はいはい。あつぽん始め、ゲーム系のメンツも仲良くさせてもらってます」
篤志「また飲み会やろう」
雅也「ＯＫ」
夏美「話戻すけどさ、うっちーと眞榮田にとっては、これが最初で最後の作品作りになるってわけだよね」
雅也「そうだね。何でもっと早く一緒にやらなかったんだろう」
浩平「作った気でいたんだろうな」

雅也「まあ、バーベキュー企画も、ある意味では一緒にやった企画か」

浩平「作品作りとは言わないけどな」

雅也「いやいや、学校生活の思い出っていう作品作りだよ」

篤志「良いこと言うね、うっちー」

夏美「さすが文章系」

瑞枝「重みが違う」

浩平「仰る通り」

雅也「（浩平に）どうする、打ち合わせする？」

浩平「お願いします！」

笑いあっている一同。

つづく